

輸血後に抗 f を検出し同定に苦慮した一症例

◎石川 雅樹¹⁾、鈴木 祐子¹⁾、山本 敦子¹⁾、岩月 奈都¹⁾、清水 舞紺¹⁾、磯村 美佐¹⁾、舟橋 恵二¹⁾
安城更生病院¹⁾

【はじめに】抗 f はシス配列にある c 遺伝子と e 遺伝子の複合抗原に対する比較的稀な抗体である。1953 年に Rosenfield らによって血友病患者から発見され、遅発性溶血性輸血反応を引き起こす可能性があると考えられている。今回輸血後に抗 f を認め、同定に苦慮した症例を経験したので報告する。

【症例】70 歳代男性。血液型は A 型 RhD 陽性，Rh 式血液型は CCDee。現病歴：20XX 年 3 月，貧血症状を訴え精査，加療のため当院に紹介。多発性骨髄腫(MDS-SLD)と診断され，貧血改善のためエリスロポエチン製剤で治療するも効果なく，定期的に RBC で補充療法を実施されていた。不規則抗体スクリーニングは初回検査時では陰性であったが，輸血後 6 カ月目に陽転化し同定を行った。

【結果】間接抗グロブリン試験と酵素法が陽性になり，抗 c や抗 f を疑う反応がみられた。しかし，いずれの反応パターンにも完全に一致せず同定に至らなかった。また，直接抗グロブリン試験は陰性であった。陽転化から 5 回目の検査時には反応強度が強くなり酵素法において

抗 f と反応性が完全に一致を認めた。ただし間接抗グロブリン試験における反応に強弱があり，複数抗体の可能性が否定できなかったため吸着解離試験を実施した。ccdee, Le^a(-) ,Fy^b(-) ,Di^a(-)血球を用いて吸着操作を行い，その上清での反応は間接抗グロブリン試験陰性であった。吸着後赤血球を用いた解離試験は間接抗グロブリン試験と酵素法で抗 f が検出され，抗 c や抗 e 等の他の抗体は検出されなかった。抗 f が同定されるまで，製剤選択は CCDee を選択し輸血を行い，副反応は認められなかった。

【考察】抗 f は CCDee, ccDEE を選択することにより約 52%の確率で適合血を準備できる。今回の症例では抗 f の同定に苦慮したが，患者タイピングと合わせた CCDee を輸血することが出来たため溶血反応を回避でき迅速に製剤を準備できたといえる。抗体同定に苦慮した際には輸血後であってもタイピングを実施し患者抗原の推測をすることや複数の検査法を組み合わせることで，より安全な適合製剤を供給することが可能である。

連絡先：0566-75-2111（内線：2442）